
デュランタ

銀木犀

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

デュランタ

【コード】

N3504C

【作者名】

銀木犀

【あらすじ】

十五歳のとき、親の事情で引越すことになった朝野道留^{あきのみちる}。その時に幼馴染みの少女と病室で交した約束は、連絡一つ取らずの五年後の再会。そして五年後、奇跡が起きた。

(前書き)

弥生 祐先生の企画された五分小説です。

デュランタ

チクタクチクタク……。腕時計の秒針が振れる音が耳に響く。

人も町も傷付いた体と心を休めるために、夢の世界へと落ちて行く深夜零時。

俺はただ、公園のブランコに座って、夜空の象徴である満月を見上げていた。

「遅いな……」

約束の零時は裕に越え、針は二十分を回ろうとしていた。

街灯の周りを、虫が羽ばたく微かな音。刻一刻と無情にも過ぎていく時間。

異常なまでに敏感になった感覚は、今から死刑場へと向かう罪人の心情の様で。

死刑場という名のタイムリミットへと、ゆっくりと確実に近付くにつれ、不安と絶望が心臓の伸縮運動を早め、それと反比例して筋肉の動きが鈍くなっていく。

ただ、彼女の事を思い出す。頭を下に向けて、神に祈る様に手を握って。

デュランタ

神様に祈った所で奇跡は起きない、事実は変わらない。あの人は、

人に知力とこの地球という物を与えてくれただけだから。努力が実った、奇跡が起きた、なんて言葉は全て必然的に決まったことで、有り得ないのだから。

……でも、この時ばかりは神様を信じるしかなかった。
一陣の風が吹く。夏なのに鳥肌が立つほど寒い風が。

「こんばんは、朝野 道留君」

懐かしき声が耳を伝う。期待と緊張の中、俺はゆっくりと顔を上げて行く。白くて細い足、純白のワンピース、昔よりも大きくなっ
た胸。

……そして、見上げた先には彼女の顔があった。

「本当に……由宇か？」

頭を縦に振り、そして彼女は笑った。その瞬間、目に溜った熱いものが溢れ出した。良かった。俺はそれだけを思った。

「久しぶりだね、道留。でも、何で泣いてるの？ 約束が違っじや
ない」

「約束……？」

「五年後会うときは笑って会おうねって、約束したでしょ」

微笑みながら、子供に忠告するように言う。

その顔も懐かしく、風穴の空いた心が埋まって行く気がした。

「泣いてるわけないだろ。欠伸だ、欠伸。こんな時間に約束したせいで、眠いったらありやしねえよ」

「だってさ、私も道留ももう大人だよ、大人。大人になったら女と男は一晚を共に過ごすんでしょ」

「お前、意味分かって言ってるか？」

「あ、止めて　！　乙女の夢を壊さないで　！」

耳を塞いで目を瞑って、近所迷惑関係なく喚く彼女は、見た目が変わろうとも心は何一つ変わってない。それは、五年という開いた時間を忘れさせてくれた。

でも……。

「……なあ、由宇は本当に病気治したんだよね？」

五年越しの再会が、信用を失わせていた。

彼女が黙り込んでしまう。横顔が凄く悲しそうに見えて、凄く愛しく感じて、消えてなくなりそうだった。

「実はね、私……」

目が濁り出す。俺の目が彼女を正しく捉えず、歪み、濁る。

彼女と俺との間に水の壁が出来た……気がした。

「なーてね。全然元気だよ、ほら……」

そう言うと、ブランコの台に足を乗せ、立ち漕ぎを始める。その後、ジャンプをして体操選手並の綺麗な着地を俺に見せ付けた。

そのまま沈黙が紡がれる。彼女は俺に背を向けたまま、何も言わない。仕方なく俺から話を切り出す。

「どうかした？」

「ねえ、道留は五年前のこの日この場所で、私に何したか覚えてる？」

日時は覚えていないが俺は五年前、幼い頃からの思い出の場所で、彼女にある事をやった。返事は聞けず仕舞で、離れ離れになったけど。

「……今日は俺がお前に告白した日か？」

「後名答。じゃあ、道留は今でも私の事を好きですか？」

時が変わろうともその気持ちは風化する事はない。

「……ああ、あの頃と何一つ変わらない」

「そう。じゃあ、私も返事しないとね」

彼女が此方を振り向く。健康になった頬を赤らめて。

「……私も好きだよ。もう押さえきれないの……この気持ち。ずっと貴方の側で見守っていたい。私の気持ち……受け取ってくださいませんか」

答えなんてもう、五年前に告白した時点で決まっていた。今頃迷うことなど何一つない。

「全部受け止めるよ」

彼女は目に涙を溜めて、笑顔を作る。それが愛らしくて、綺麗で、硝子のように碎けそうで。

俺はただ、その姿に見とれていた。

「ありがとう……道留。目を瞑って」

彼女が俺の頬に手を添えて、ゆっくりと俺の顔を上げる。

近付く顔と顔、微かに聞こえる息遣い。心臓は高鳴り、顔は高揚していく。

そして……口付けをした。彼女と俺のファーストキス。

一陣の風が吹く。夢の全てを吹き飛ばすように。

その時には全てが終りを告げていた。

唇の触れた柔かい感触。温もりのある体。そして、彼女。その全てが消えていた。

「道留ちゃん」

訳が分からない俺に、突如声が掛る。その声の持ち主は、彼女の母親だった。

公園の入り口からゆっくりと此方に歩いてくる。

街灯の明かりがその姿を半分照らし、紡がれた糸を切るアポロトスの様に見せた。

「由宇に頼まれてね、貴方に……大事な話があるの。あの子はね……」

「嘘だ」

「もうこの世には……」

「嘘だ！ だって由宇は此処に来て、俺の側で見守り続けたって言ったんだ！」

現実で、この場にあつたのだ。暖かい温もりも柔かい感触も、全部感じとれたのだ。安堵感と幸福感で満たされていたのに、何で今頃になってこんな話が……。

デュランタ

「……多分それは、あの子の意思でしょう。この場所には、あの子の遺骨と共に一輪の花も植えたの……」

あの子の意思？ 理解が出来なかったが、彼女の母親の目線の先へと俺も顔を向ける。

俺が見たのは、街灯の下で照らされた、青紫の背の高い花。

デュランタ、花言葉は見守る。

デュランタ

(後書き)

恋愛ものは不馴れですが、何とか書いてみました。作者の後都合主義が光る小説ですが、評価や批評をもらえたら嬉しいです。

デュランタ

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3504c/>

デュランタ

2008年8月29日18時07分発行